

## 竹本座遂に崩壊

文三郎脱退、近江の驕奢

竹田出雲と吉田文三郎といふ双翼をもつて煽り立てた竹本座の人氣は、「忠臣藏」以來ますます昇騰するばかりで、従つてこれに對する東の芝居の豊竹座も勢ひ競争の形となり、兩々鎗を削つて鬪つた。當時兩座にはどういふ戰士が轡を駢べてゐたか、先づ竹本座からいふと、大和掾を中心に政太夫、錦太夫、紋太夫、千賀太夫の精銳あり、人形に吉田文三郎、桐竹門三郎、桐竹助三郎、中村勘四郎、三味線には大西藤藏、野澤喜八郎、富澤藤次郎など。豊竹座の方は、越前少掾を中心として若太夫、駒太夫、鐘太夫、人形には豊松藤五郎、藤井小八郎、同小三郎、若竹東九郎、三味線に鶴澤重次郎、三三など。實にその對抗戦の花々しさが想像される。かくて道頓堀否大阪全市の人氣を兩座に集中し、「歌舞伎はあつて無きが如し」とまで評さしめた。操り芝居の天下は、出雲の死（寶曆六年）と共にその原動力を失ひ、次第々々に凋落の秋と移

つて行く。この意味ふかき兩座顛落の状をつぶさに物語りつゝある記録の跡を辿つて見よう。併かし元祖義太夫が「當流義太夫節」樹立以來根深き基礎を据ゑてゐるこの操り芝居が、如何に下り阪に陥ちたとはいへ、さう一朝一夕には崩れ落ちる筈がない。そこにはいろいろと擧げなければならぬ理由がある、先づ竹本座の方から始める。

絶頂の人気にまで吊り上げた座主出雲の得意はさることながら、その股肱となつて働いた吉田文三郎といふ人物が一廉の藝術家でありながら、やはり世間並の人情より上のものは持ち合はさなかつたものと見えて、操り全盛の實權を握つてゐる出雲が羨やましくなつて來た。ひよつとすると文三郎は、こゝまでの全盛にしたのも結局自分の腕の力が九分九厘まで占めてゐると思つてゐたかも知からない。それはともかく、此太夫との争ひ以來衆望が己れに聚まつてゐることもよく知つてゐるのだから、

「なに今に見ろ天下は俺れものだ」

と肚のうちで考へ考へ日を送つてゐた。

心のうちで反旗を翻へしてゐた文三郎は、たうとうその野心の實現に近づかうとして、一黨の人々を率ゐて、永年馴染みの竹本座の舞臺をあとに、おさらばをきめてしまつた。けれども

如何に文三郎が威張つても、それは所詮鵜の眞似をする鳥で、出雲のやうな興行手腕が無いかぎり、駄目な話にきまつてゐるのだが、本人はさらに其處に氣が附いてゐなかつた。まあそれは兎も角、文三郎に退座された竹本座は、なんと云つても人氣者のことだから、大打撃に違ひない、あくる日から、バツタリと見物が落ちてしまつたのは止むを得ない。かういふ大きなヒビが入つてくると、もうまた元の容に還へさうとすることが容易に出来るものではない。何か微妙な運命の糸といふやうなものがそこにあるのか、結局操り座が操られてしまつてはどうにも致し方がない。捨てられた竹本座も捨て、行つた文三郎も、ともにもう神に見離されてゐる時だつた。かういふ大きな崩れ穴が出来たところへもつて来て、こゝにもう一つ、竹本座没落に直接大鐵槌を加へたやうな出来ごとが一つある。

それは、出雲の跡を襲いで、竹本座の座主を繼いだ竹田近江のことである。もともと興行成金の竹田家のことではあるが、これが紀文や淀屋の眞似をして、滅多矢鱈に榮華三昧に耽つたのである。もとより淀屋のやうな大世帯ではないから言ふには足らぬが、それでも、寶曆十一年の十二月、自宅で忘年會の催しをして、市中の金持連中を招待して、一夜に四季の風景を見せると云ふ趣向を凝らした庭園を見物させたりしてゐる。お手前物のからくり仕かけて、春夏

秋冬、折々の變化を、贅を盡くし美を極めて、寒暖の氣候の變化までも客に感じさせるといふのだから、これは並たいていの仕掛けではないことが想像出来る。まあちよつとした遊び事にもまでこんな大袈裟なことをしてゐる近江の平生のことが、人の噂に上らぬ筈はない、やがてはその筋の目にあまるといふ次第で、竹田近江入牢申し付けられるといふ騒ぎ。もうかうなつては、義太夫節も操り芝居もあつたものぢやない。そこへもつて來て、其筋からは大阪中の町人共へ五千兩の御用金を申し渡されるといふ一件があつて、これが爲めに市中はまるで灯の消えたやうな淋しさになつてしまつた。ちやうど此時、竹本座では「古戰場鐘懸松」といふ狂言を出してゐたが、人氣はもとより悪く、まるで呪はれたやうな姿であつた。そこで大阪烏は此の外題にもちつて「五千兩金借待」など言つて地口つたものだ。

まあ以上の状態で暫くは、不景氣時代といふことになるが、市中の人氣といふやうなものは五千兩一件が次第に忘れられると同時にぼつぼつ恢復して行つたが、恢復した人氣は、もう再び操り芝居の方へは還つてはくれない。自然の勢ひで、これが歌舞伎芝居の方へと流れて行くのだから實に餘儀ない次第である。出雲がせつかくの苦心で案出したところの、人形本位、文三郎が創意になる寫實的演技も、所詮は歌舞伎芝居の爲めに役立て、やつたやうな結果になるの

である。もうそろそろ見物側の方では、如何に人形が血みどろな大立廻りをしたところで如何に大道具が本物を寫したやうに凝り上げてあつても、もうでくのぼうの操り人形では満足しないことになつてゐた。忠臣藏にしても、千本櫻にしても、やはり生きた役者が一生懸命に演ずる方がおもしろいといふことになつて來た。奇抜な趣向も、新しい工夫も、死物の人形の舞臺では所詮は生きた人間の舞臺ほどに効果が上らないのは當然で、つまりは千變一律にならざるを得ない、何か異常な特色を見せない限り、見物にはそろそろ鼻についてくる時分であつた。淨瑠璃の語り物といふ鑄型から突き抜けて、生き生きした舞臺技巧をもつて、人形の舞臺を一轉化させた出雲の作風や考案は、結局は人形の物ではなくて人間の物だつたのである。かういふ傾向に導かれた見物が、だんだん人形の動作では嫌りなくなつて、同じくは歌舞伎の方でこれを見てみたら、といふ慾望や興味をもち出したのは當然の歸結だとも云ひ得られる。意外な儲け物をしたのは歌舞伎の世界である。人形を開發するつもりでやつてゐた出雲の大仕事は、なんぞ圖らんそれは歌舞伎の爲めにしてやつてゐた仕事だつたのである。廂を貸して母屋を取られた形だ。こんな風で、當時の人形舞臺で評判を取つた狂言は直ちに歌舞伎の方へ移されて、而かも生きてゐる役者達が人形以上に素晴らしい効果を揚げて行くといふ状態だから、なほな

ほ始末が悪い。さうして、その後、明和三年の正月興行に近松半二その他の合作「本朝二十四孝」が、かういふ衰残の中から、辛くも火の手を揚げて、どうやら以前の盛況を思ひ出させるやうなことがあり、なほ次で「太平記忠臣講釋」や「關取千兩幟」が上演されて、昔を今に爲すよしも有りさうには見えたが、大勢はもう何うすることも出来ない。一たび冷めてしまつた見物の操り熱は、なかなかこんなことでは、とりかへしがつかなかつたのである。その翌明和四年十二月にはあはれさしも全盛を誇り、道頓堀の華と唄はれた竹本座なる操芝居も、創業八十年の歴史をのこして、離散閉場、跡は山下八百藏の歌舞伎芝居が譲り受けるといふはかない有様。

尤もその後は竹本座再興……豊竹座との合併……などと稱へて、時々不定期の興行はやつて居た。明和八年正月に、近松半二の名作「妹背山婦女庭訓」が、ひよつこりと一時的好人氣をもち上げたのも水の泡で、これを掉尾の歴史的記録として、其後は有つて無いが如く、天明三年、この最後の名作者近松半二さへ死するに及んで、寛政の初めには完全に竹本座の座名さへ記録には見られなくなつてゐた。